

児童の「伝えたい」思いを高める授業づくりへの一考察 —動機付けに着目して—

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

言語・社会系教科実践高度化コース

英語科教育実践分野

氏 名 尾崎 紗矢

実習責任教員 佐藤 美智子

実習指導教員 山森 直人

キーワード：小学校外国語，動機付け，「伝えたい」思い

I 研究課題の設定

1. 研究背景

中央教育審議会答申(平成 28 年 12 月 21 日)を受け、外国語活動・外国語科においても、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に沿って求める資質・能力の具体が示されている。『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語活動・外国語編』の「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関わる目標には、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」と明記されており、「児童が言語活動に主体的に取り組むことが外国語によるコミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を身に付ける上で不可欠であるため、極めて重要な観点である」とされている。

また、今回の学習指導要領改定のキーワードの一つに「カリキュラム・マネジメント」があり、「何ができるようになるか」という視点で教育課程全体を見渡し、教科等相互の連携を図り、関係性を深めながら、教育課程を編成していくことが求められている。

英語の授業やコミュニケーションに関する小学生の意識については、文部科学省「小学校外国語活動実施状況調査の結果について」(平成 26 年度)によると、91.5%の児童が「英語が使えるようになりたい」と回答しているにも関わらず、約3

割の児童は英語や英語の授業に対して肯定的ではないことが伺える。また、「英語の授業の中で楽しいと思うこと」については、「英語で友達や外国人の先生と会話すること」と回答している児童は6割、「英語で自分の事や意見をいうこと」と回答している児童は5割程度に留まっており、小学校段階でのこうした実態は大きな懸念材料であり、改善が求められる。

2. 置籍校について

置籍校は、高知県の西部に位置しており、児童数 220 名、学級数 13 学級(特別支援学級を含む)、職員数 36 名の中規模校である。外国語科教育においては、外国語専科教員と ALT の2人による授業実践が行われている。

児童は、明るく活発であり、興味があることに対して意欲的に取り組むことができる。外国語の授業においても、単語を練習したりゲームをしたりする活動に積極的に取り組み、楽しんで英語を学習している姿が見られるが、自分の考えや気持ちを相手に伝えたり全体の前で発表したりすることに対しては消極的な児童が多く、英語を使って主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度においても課題があると感じている。

3. 本研究の目的

前述した研究背景を踏まえ、新学習指導要領が求める「主体的にコミュニケーションを図る児童」の育成のためには、まず「伝えたい」思いを児童

に持たせることが重要であると考えた。そこで、本研究の目的は、児童の「伝えたい」思いを高める授業の在り方を探ることとする。

II 先行研究

石川(2017)によると、Dornyei(1998)は動機付けについて次のように述べている。「強い動機づけがあれば、言語適正と学習環境の両方において相当の問題があったとしてもそれを帳消しにできる。(p.146)」八島(2019)は、「本当に自分の伝えたいことを真剣に伝えようとするとき、人は意味に注目します。意味が理解でき、内容に惹きつけられるとき、使う言語が母語話者のようでないことはおそらくそんなに気にならないでしょう。さらに伝えたいという気持ちが強いと、できるだけ効率よく伝える言語をめざすという動機が生まれるでしょう。(p.186)」と、他教科やトピック・テーマなどの多様で豊かな本物の内容と外国語学習を統合した CLIL 教育の良さについて述べている。金森(2017)は、小学校の英語授業においては「他教科の内容と関連した英語授業」と考え、CLIL 的な他教科との連携について、英語の指導に関連づける手法を3つ挙げており、本研究においては、②の「他教科の学習活動(題材)や内容と関連付けたり、それを取り入れたりする視点」で単元を構築することで、「伝える」内容をもたせ、児童の「伝えたい」気持ちを高める実践を行うこととする。外国語活動や外国語科と他教科等を関連させる「よさ」について、佐藤(2017)は、「他教科で得た学びが子どもの安心感や自信につながる」「双方向に関連させることにより学びが一層深まる」の2点を挙げている。

評価について、松沢(2011)は、「授業内評価においては、最終的な成績をつけることと同時に、学習者の普通の学びを支援し、目標へ導いてい

くことが、より重要な目的となります。その点で、授業内評価では「継続的で形成的な評価」の役割が重要となります。(p.61)」と述べている。菅・中嶋・田尻(2005)は、「評価というものは、子どもたちを元気づけて、もう1歩がんばろうかなと思わせるためのもの。あるいは先生方自身が「点数が低いのは、指導方法が間違っていたのかな」「もう少し、授業を改善しようかな」と、思うためのものである。(p.74)」と述べている。単元の中で継続的に形成的な評価を行い、児童の進歩や成長、学習に対する気持ち等を見取り、指導者の指導改善に活かし、児童の学びの意欲の向上に繋げることが大切である。

III 実践研究の計画と実際

1. 計画

置籍校における児童の実態を把握し、先行研究を基に研究仮説を立てる。仮説と児童の実態に沿って、動機付けに焦点をあてた授業実践(他教科等との連携を図った単元構想、動機付けを図るための指導の工夫や評価)を行い、実践研究が児童に与えた影響について、意識調査や児童の振り返りシート、パフォーマンステスト等から考察する。実践の対象は第5学年とする。

2. 実際

(1)授業実践 I

授業実践 I では、道徳科や「学級きらり」と連携を図り、Unit4「He can bake bread well.」を行った。道徳科と外国語科を連携することで「自分や友達のよさを知る」という目的意識をもたせたいと考えた。

外国語科では、単元ゴール「友達のできることを ALT に紹介しよう」を共有し、友達のできることを動画で撮影したり、クロムブックを用いて伝える練習をペアで行ったりするようにした。実際の映

像を使用することで伝える内容をリアルにしたり、紹介するペアを普段から仲の良い友達に設定したりする等の工夫を行うことで、「伝えたい」思いを高めるようにした。また、友達が自分のことを紹介してくれることで、自分も「友達のことをたくさん教えてあげたい」という思いが高まると同時に、児童間の新たな関係が生まれることを願った。毎時間の授業の最後には、振り返りシートを書く時間を設け、単元への意欲や児童の「伝えたい」思いの高まり等を測った。また、児童の振り返りを筆者の指導改善にも活かした。

単元終了後には、外国語の時間に行った友達紹介を、全学級で取り組んでいる「学級きりり」の活動に活かし、児童の自己肯定感の高まりを目指した。

②授業実践Ⅱ

授業実践Ⅱでの成果と課題を踏まえ、主に次の3点について改善を加えた。

①単元ゴールの設定

「四万十市に新しく来た ALT に、特産品を使ったオリジナルメニューを紹介しよう」という単元ゴールを設定した。紹介する相手が会ったことのない ALT であること、アメリカから来たばかりであり四万十市のことを全く知らないこと等から、英語でふるさとのオリジナルメニューを紹介する必然性を生むことができると共に、児童は「教えてあげたい」という思いで学習に取り組むことができると考えた。

②児童の思いで学習を進める手立て

教師から一方的に単元ゴールを設定するのではなく、ALT と効果的に連携することで児童の「やりたい」気持ちを高め、自分たちの意志でやっているという認識をもたせることで、学習意欲の向上を図った。また、「特産品を追加したい」「ALT に質問したい」等といった児童の思いに寄

り添いながら授業を進めた。

③「伝わった」達成感を味わわせる工夫

買い物の際には、ALT2人に参加してもらい、児童とやり取りをしてもらった。また、オリジナルメニューを発表した際には、ALT に評価をもらった。このような工夫を行い、英語が「伝わった」喜びや達成感を味わうことで外国語学習に対する意欲の向上へと繋げた。

3. 結果と考察

(1)意識調査より

外国語の授業や、授業への参加態度についての肯定的な回答が、事前より事後の方が増加傾向にあるという結果が見られた。英語でコミュニケーションを図ることについての肯定的な回答も、同様の結果であった。しかし、英語でコミュニケーションを図ることが「あまり好きではない」「好きではない」と回答している児童もいることから、児童が自信をもって英語を使うことができるような手立てや指導の工夫を行う必要があったと考える。

(2)パフォーマンステストより

事前の意識調査で否定的な回答をしていた児童のパフォーマンステストを比較すると、3月には、自分のことだけを伝えたり表現が出てこないことから黙ったりする等の様子が見られたが、10月には、筆者に質問したり反応したりしながら会話を広げようとする様子が見られた。また、表現が完璧ではなかったり時間がかかったりするものの、粘り強く話そうという姿も見られ、英語でコミュニケーションを図ろうとする意欲の高まりを感じた。

(3)授業後の様子

2学期から英語を取り上げて自主学習をする児童が増えた。英語に対し否定的な回答をしていた児童も、英語の自主学習に取り組むようになった。また、授業実践終了後にももらった、児童からお別れのメッセージには、「外国語の授業がとて

も楽しかったです」「苦手だった外国語がちょっと好きになった」等と書かれていた。「伝えたい」思いを高める授業づくりを行ったことで、児童の外国語の授業に対する意欲の向上へと繋がったことがわかる。

IV 成果と課題

1. 成果

実践研究の結果と考察から、主な成果と課題を以下に挙げ、結論を述べる。

○動機付けに着目して、他教科等との連携を図った単元を構築し、指導の工夫や継続的な評価を行いながら授業実践を進めたことで、児童の「伝えたい」思いが高まり、単元末の発表に向けた積極的な取り組みに繋がった。

○外国語の授業に意欲的に取り組み、積極的に英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする児童が増加した。また、意識調査においても、外国語の授業やコミュニケーションを図ることに対して肯定的な回答をしている児童の割合が増加した。

○「伝えたい」気持ちが高まることで、学習意欲の向上とともに、習得した新しい表現を実際のコミュニケーションの中で使おうとしたり、相手の話にリアクションをしながら会話をしたりする等、コミュニケーションに対する意欲と会話を継続させる技能面での向上が見られた。

2. 課題

○自信を持たせる指導

児童の様子を見取ったり中間評価を入れたりすることで、児童の英語力を伸ばし、さらに成功体験を積ませることで自信を持たせることが大切である。

○英語を学ぶ必然性を感じさせる授業

外国の小学生や ALT 以外の外国の人等、世界の人と繋がるような体験を授業内で仕組んで

いく必要がある。

3. 結論

本研究では、仮説を基に、授業実践や調査による検証を行ってきたが、上記で述べている実践研究の成果からその有効性が明らかとなった。

他教科等との連携を図ることで「伝えたい」内容をもたせたこと、「伝えたい」気持ちを高めるために単元ゴールの設定や共有の仕方を工夫したこと、高まった思いを維持するための指導の工夫や継続的な評価を行ったこと等が、外国語の授業やコミュニケーションに対する意欲を向上させた。また、情意面の高まりがコミュニケーションの技能面の高まりにも影響した。

こうしたことから、仮説に挙げた、動機付けに着目した他教科等との連携を図った単元の構築や指導の工夫、継続的な評価の効果を確認できたとと言える。

〈引用文献・参考文献〉

文部科学省(平成 28 年 12 月 21 日)幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)【概要】(中教審第 197 号)

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902_1.pdf

文部科学省 小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語活動・外国語編

文部科学省 平成 26 年度「小学校外国語活動実施状況調査の結果について」小学校 5・6 年生(1-2)児童の外国語活動に対する意識

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362169_02.pdf

石川慎一郎(2017)『ベーシック応用言語学 L2 の習得・処理・学習・教授・評価』ひつじ書房

八島(2019) 八島(2019)『外国語学習とコミュニケーションの心理』関西大学出版部

金森(2017)『主体的な学びをめざす小学校英語教育 教科化からの新しい展開』教育出版

佐藤美智子(2018)『間違えたくない先生、必読！教科横断的な外国語の授業づくり 小学校教員のための教育情報メディア「みんなの教育技術」by 小学館』(『小六教育技術 2018 年 9 月号より])

<https://kvoiku.sho.jp/13287/>

松沢伸二(2011)「英語教育評価論」石川祥一・西田正・斉田智里編『テストと評価：4 技能の測定から大学入試まで』大修館書店

菅正隆・中嶋洋一・田尻悟郎(2005)『ゆかいな仲間たちからの贈り物』日本文教出版